

名僧とは

「仏法は人によって伝わる」という言葉があるように、愛知県に多くの寺院が所在することは多くの僧が輩出したためといえよう。特に江戸期は、尾張の仏教学が各宗の宗学をリードしていたといっても過言ではない程、尾張出身者の多くの著作をみることができる。

では、名僧といわれる人を定義してみると、世に名を馳せて学徳の秀出た名高い僧のことであるが、それを具体的にながめてみれば、

- (1)多くの寺院の建立や弟子を育成して門流を発展せしめた人。
- (2)大本山や総本山の寺院へ昇住した人。
- (3)仏教学や宗典の研究を行って著作や語録などを残した人。
- (4)武将や文人などと交流し地元の文化向上や地域の発展に尽力した人。

の4種に分けることができよう。また、近代以後の人物は評論した雑誌や名鑑などが刊行されており、師家（禪定家）、学者、布教家（説教家）、経論家、教育家、文章家、事業家、政治家などに区分することができる。

ふうがいほんこう

画僧とも称された風外本高

紅葉で有名な足助の香風溪に香積寺がある。天保五年（一八三四）、五十六歳で二十五世住職となった風外本高（一七七九—一八四七）は詩文にすぐれ、余技としてたし

なんだ南画（文人画）は池大雅に私淑して数多くの作品をのこした。そのため世間では、禅僧としてよりも画僧として注目されている。

天保六年、尾張の寺院で禅の公案集の第一である『碧巖録』を講義した。聴講者は争って集ったといわれ、講義録の『碧巖録耳林鈔』は禅僧風外の面目を知ることができるものである。

文政元年（一八一八）、四十歳の風外は大阪の円通院に住職した。円通院は伽藍が荒廃していたが、風外は一向にかまわず、雨が漏れば別の席に移り、そこが漏れば、また別の場所へ移るといふ生活であった。

檀家の豪商川勝太兵衛は風外を試そうとして円通院の門をたたいた。川勝がいろいろ話しかけるが、風外の返事はない。風外はじっと障子の方をみつめている。川勝も目を

移すと一匹のアブが外へ出ようとしきりに障子に向って頭をぶつけていた。

何を考えているのかと風外に尋ねると、風外は「アブをみると同じ所ばかりぶつけている。出ようと思えば障子の破れ穴や戸の隙間からいくらでも外に出られる。それを出られぬ所から無理に出ようと



風外本高画像

して大切な頭を打っている。これはアブばかりでない。人間も同じである。世の中にはいたずらに進むことのみ考えて自分が退くことを知らない。一步退いて広くみれば、いくらでも生きる道がある」と答えた。

この説法に川勝は感銘を受けたが、毎日毎日忙しく走り

回っている現代の私たちにも風外は論じているかのようにである。

風外は禅僧の教育者でもある。門下からは梅崖奕堂（大本山総持寺独住一世）、白鳥鼎三（大本山永平寺西堂）、原坦山（東京帝国大学印度哲学初代講師）など明治初期に活躍した傑物を輩出した。

奕堂は毎日毎晩、坐禅三昧である。風外は坐蒲を与え「貴公は我宗の骨髓だ」という。鼎三は毎日毎晩、読書三昧本に書入れをして勉学に精進している。風外は喜び「貴様は我宗の命脈だ」と讃め称えた。

坦山は大法螺吹であった。風外は叱りもせず「貴前は我宗の本領である。禅宗坊主らしく気骨がある」と快談した。風外は各人の本領本分を十分に發揮させ、人を拘束せず人物を作った。つまり個性を尊重した教育だったのである。

弘化四年（一八四七）六月二十二日、六十九歳で亡くなっている。

たかま しゅうどう

平和公園墓地を推進した高間宗道

市内中心部の寺院には墓地がない。墓地は戦災復興事業により平和公園へ集団移転したからである。

戦災をうけた名古屋が、近代都市名古屋へ生まれかわるためには、焼け落ちた瓦礫の中に埋もれる墓石の残った墓地が、道路や公園などの造成に障害となった。

そこで、市は寺院に協力を要請し、市民にも墓地移転の趣旨を説明した。しかし、仏教会では「墓あればこそ檀家と寺院とのつながりも深い。分離されては寺院の経営が成り立たない。死活問題だ」として反対した。

ところが、市の計画に対し、積極的に推進して事業の遂行に努力した住職がいた。乾徳寺（中区新栄）十五世の高間宗道である。高間は「いつまでも、寺院が墓の上にあぐらをかいて檀家からのつけ回けを待っていていいものか。むしろ本堂が焼かれ、墓もとられた焼跡から生まれ出るものこそ本当の宗教だ。社会のために役立つものならこの際、名古屋百年の大計のために喜んで墓を移転すべきだ」と主張し、住職らを説いて回った。

当時三十二、三歳である。

昭和二十一年六月、各宗派より代表を集めて「名古屋市戦災復興墓地整理委員会」を組織し、その委員長に就いた。そして市へ寺院側の要望や条件を提示し、了解した市は寺院側の信頼にこたえて工事に着手した。移転の完了には十年の歳月を費し、二百七十八カ寺、約十八万七千基の墓石が移転された。



高間宗道 肖像

人と対等に話し合う必要性から長髪にしたためである。長髪の禅僧高間は日常生活、社会の中に禅を生かさねばならないと考えていた。土地も有効に使うべきだと主張し、当時としては先進的な考えをもっていた。

本名は「しゅうどう」であったが、役人からは「あなたが来ると騒動になるから」といい、「高間大宗道」とも呼ばれた。エンジンがかかる为止まらないブルドーザーのような猪突猛進の人であったが、平成元年十二月二十四日、七十五歳で死去した。平和公園に眠っている。

事業が円滑に進んだのは、高間の献身的な努力による。しかし、中傷されたり誤解されたりと、多くの苦労があった。その活躍ぶりは新聞記者の村松喬氏によって新聞に連載され『新しい鯢』と題して単行本となった。

本の中には「快僧」と紹介されているが、俗僧とも称された。それは市との交渉で役所へ出ることが多くなり、役

墓地整理委員会が記録した平和公園に関する調書や書類などは、すべて市政資料館に寄贈されている。その中に事業の基本となった「名古屋市に於ける宗教平和公園の建設に就て」の高間自筆の原稿があった。移転の理由、事業の概要、新構想など、高間独自の考えが記されている。

近代都市名古屋を築いた一人として、高く評価される快僧であった。